

住民の手で「おもてなし」のまちづくり ～高取土佐街なみ天の川計画～

奈良県中部にある高取町は、中世以降、高取城の麓^{ふもと}の城下町として栄えたまち。その中心街だった「高取土佐の街なみ」には今も武家屋敷や町家が残り、歴史の香りがただよう。06年1月、行政に頼らず住民自身の力で街なみの整備や「おもてなし」で交流人口を増やし、まちの活性化をしていこうと住民が立ち上がった。今回は、街なみを散策する観光客に「ゆっくり」「じっくり」と観て楽しんでもらえる街なみづくりをめざす住民グループ「高取土佐街なみ天の川計画」の取り組みを追った。

高取町の現況

高取町は隣接する明日香村などとともに、古墳時代から飛鳥時代の遺跡が多く残る古代史のふるさとであった。多くの渡来人が移り住み、異国文化が花開いた地域でもある。

中世、近世には、日本三大山城のひとつ「高取城」の城下町として栄えた。また、西国6番札所壺阪寺の門前町でもあり、江戸時代には街道筋は、行き交う人たちで溢れ、油屋、鋳物屋、呉服屋など500棟もの商家がひしめき合っていた。

明治維新の改革により、お城は取り壊され、武士階級も禄を取り上げられ、城下町・高取は衰退していった。そこで、生活にあえぐ士族の救済と城下町の復興策として取り組まれたのが「製薬業」「売薬業」である。高取町は明治・大正・昭和に



旧高取藩筆頭家老屋敷植村家長屋門（奈良県重要文化財）

かけて「薬のまち・高取」として蘇った。

今回取り上げる「高取土佐街」は、中世以降、城下町・門前町・薬の町の中心地として発展してきたまち。昭和35年頃には、土佐街道沿いに約500戸の民家があり、その7割が商店と、まちの

中心的な商業ゾーンをなしていた。ところが、近年は近隣に進出してきたデパートや大型スーパーなどにより、通りの商店がほとんどなくなってしまった。それに伴い人通りもまばらになり、往時の姿は見る影もなくなっていた。



高取町に「土佐」？

まちの中心街である地区は「上土佐」「下土佐」と呼ばれ、奈良らしくない地名がついている。これは、6世紀の初め頃、大和朝廷の造営のため土佐国（現在の高知県）から多数の人が召し出され、その後住み着いたことによるものといわれている。高取の地が古くから遠い土地との関連を持っていた名残を示すものとして、興味深い。

行政による街なみ整備

高取町では、町主導で古い武家屋敷や町家が残る土佐街なみの整備が行われてきた。その一つが石畳みの道路整備である。1995年の阪神淡路大震災の復旧工事の際に路面下から大量に出てきた路面電車の敷石を譲り受けて97年に完成した。



石畳の道路（左）と埋め込まれた薬草タイル（上）

2000年4月には、明治から大正にかけての呉服屋として使われていた町家を改修、町の観光案内所「夢創館」として再生した。まちを訪れる観光客に町の案内パンフレットや資料の展示、特産



夢創館正面（上）とその内部（左下）、裏にはくすり資料館（右）

品の販売、お茶の無料サービス等を行うほか、ギャラリーとして貸し出すなど、高取土佐町の観光集客の核施設として整備を進めてきた。

住民の手によるまちづくりが始動

このように、高取町では行政が先行する形でまちの観光活性化への取り組みが行われてきたが、それに呼応するように住民側からも街なみ活性化への動きが立ち上がってきた。

退職してまちに戻ってきた元証券マンの野村幸治さん（65）が代表を務める「高取土佐街なみ天の川計画実行委員会」がそれである。野村さんは、高校3年まで地元で育ち、大手証券会社に就職。在職中は高取町に妻子を残して東京や名古屋で約15年間単身赴任を経験、02年6月に退職し地元に戻ってきた。

かつて店が立ち並んでいた城下町は空き家が増え、人通りも少なくなっていた。「魅力的な町なのに惜しい」と思ったのが、町おこしに携わるきっかけになった。

その翌年に「たかとり観光ボランティアガイドの会」設立に参加し、まちにやって来る観光客らにまちの歴史や文化について案内しながらまちを巡り歩いた。よりよいガイドをするため、まちの歴史をひも解いて学習を重ねるにつれ、ますますまちへの愛着を深めていった。

06年1月に、街なみに以前の賑わいを取り戻そうと「高取土佐街なみ天の川計画実行委員会」を立ち上げた。「街道沿いに町家が並ぶ街を天の川に見立てて、住民一人ひとりが輝く星となって観光客を迎える」というコンセプトから会の名前が決められた。

ただ、土佐町のある高取町はご多分に漏れず財政難に喘いでいる。行政に頼ってまちの活性化を進めるのは難しい。「天の川計画」の合い言葉は、「町（行政）に何かを求めるのではなく、町（地域）に何ができるかを考え実践する」。これまでまちづくりは行政主導で進められ、住民は行政に

何かをしてもらうという発想で関わる例が多かったが、同計画では住民の自意識を育て、行政に頼らないまちづくりをめざしている。

その中心になるスローガンは「『住民のもてなし』をブランド化する」だ。住民あげての「おもてなし」でもって、街なみを散策する観光客に「ゆっくり」「じっくり」と観て楽しんでもらえる街なみづくりを追い求める。

同計画は立ち上がってまだ日は浅いが、これまで、町役場やまちの観光協会・商工会、県内の大学などと連携しながら数々のまちおこし事業に取り組んできた。

同計画では、次の3つの重点目標を柱に「魅力創出計画」を立てて「高取土佐街なみ」の魅力を磨き上げている。

第一は、「美しい街なみの創出」。06年2月に日本100名城の一つに選ばれた高取城は、いわば高取町の町のシンボル。現在は石垣など城郭の一部が残るのみであるが、奈良産業大学に持ちかけ06年11月にCG（コンピュータ・グラフィックス）で往時の姿を再現させた。



CGで再現された高取城全景（上）と現在の高取城（左）

また、現存する城下町の伝統的建物である町家や武家屋敷を保全し景観を守るとともに、街なみを花いっぱいにする「土佐街なみ花回廊」でゴミがなく花で飾られた街づくりを行っている。

第二は、観光客の滞在時間を延ばすため、住民との交流場所としての街なみの創出である。町の地場産業である製菓・配置菓販売などを紹介する「くすり資料館」（高取町観光協会）や高取町出身

で昭和期を代表する俳人の一人、阿波野青畝^{あわのせいほ}の足跡をたどる「青畝文学館」、土佐街の人たちの暮らしを写真や道具・調度品で展示し昔の生活空間を体感する「土佐街懐古館」の他、キトラ古墳の原寸大石室を再現した「キトラ古墳復元石室」をいずれも06年4月にオープンさせた。



「土佐街懐古館」（左上は外観、左下はその内部）「青畝文学館」（右上）とキトラ古墳復元石室（右下）

新たなイベントの創出としては、06年4～6月に住民手作りの手芸品や野菜を売る30店余りが出店する「手作りにぎわい市」（月1回）を開いた。また、07年3月には町家の店先（窓際）玄関先などに雛人形を飾り公開する「町家の雛めぐり」にも取り組んでいる。

他にも、住民とのふれあいを目的として、町家を開放して餅を小さくちぎって竹の枝につける「もち花づくり体験」や、黒大豆をもぎ取って湯がいて食べたり、竹を利用して炊き込みご飯をつくる、昔ながらの農産物加工体験や生活を住民とともに体験する場を創り出している。

◆町家の雛めぐり

土佐街道の民家や商店に雛（ひな）人形を飾り、訪れる人に楽しんでまちめぐりをしてもらおうと、07年3月の1か月を通して行われた。一過性のイベントではなく、来訪者との交流を継続的に深めて町おこしにつなげることを願って「実行委員会」が企画した。

自宅に家の雛人形を飾る家が23軒、飾る場所を提供する家と雛人形を貸す家19軒をマッ

チングし、合計 42 軒のべ約 200 名の住民ボランティアが参加した。

雛人形を飾る家では、家族とおひな様の歴史をつづった「町家の雛ものがたり」の添え書きも展示し、お茶や飴などと「おしゃべり」のおもてなしで観光客を迎えた。また、徳島県勝浦町から雛人形 500 体をもらい受け、「雛の里親館」としてJAの元倉庫での展示も行った。

イベント期間中（31 日間）の来訪者は 8,151 名を数え、町の人口（7,995 人：07 年 7 月末現在）を超える来場者があった。期間中に実施したアンケートでは、観光客からは「おもてなしにキュンと来ました」「住民の皆さんの頑張りが伝わってきます」、住民側からも『『美しいまちですね』と言ってもらい、自分のまちを見直した』など、観光客と住民のふれあいが感じられる好結果が得られた。



住民宅の雛飾り（左）と「雛の里親館」の雛人形たち（右）

第三は、「街ナビの整備など観光客に気軽に来て楽しんでもらえるまちづくり」。06 年 11 月には観光バス用の無料駐車場を設置（町観光協会）、同 12 月には QR コードを携帯電話で読み取って観光スポットの案内を行う「携帯電話によるナビゲーションサービス」も開始。そのほか、観光客向けにまちの観光資源をコンパクトにまとめた『『高取土佐街なみ散策』ガイドブック』を作成した。今後は、案内看板の整備なども行っていく予定である。

客観的なデータで検証し地域の魅力を磨く

同計画では、以上のように、交流人口を増やす取り組みを次から次へと展開してきた。最近、こうした取り組みが外部からも注目され、評価されるようになってきた。

本年 4 月には、国土交通省の「平成 19 年度地域づくりの取り組み支援」で地域資源を活用した戦

略的なマーケティング手法の検討調査地域に選ばれ、同 5 月には奈良県からも「もてなしのまちづくりモデル地区」に認定されている。また民間では、同 2 月に、ユニークな地域づくりを進める自治体を表彰する 06 年度の「毎日・地方自治大賞」（毎日新聞社主催）で「土佐街なみ天の川計画」が高い評価を得て高取町が奨励賞を受賞している。

同実行委員会代表の野村幸治さんは「人がどれだけ集まったとか、売上がどれだけ上がったかで一喜一憂しない」「集まった人がどのような経験を心得て帰ることができたか、なぜ売上げが上がったのかをきちんと調査することが大事」という。元ビジネスマンらしく、きちっとした計画を立て、それに基づいて、実行・検証・行動という P D C A サイクルをまちづくりで実践する。

今年 3 月に実施した「町家の雛めぐり」でも、来場者のほとんどが立ち寄る「雛の里親館」でカウンターで来場者数の実数を把握したり、来場者だけでなく住民にもアンケートをとって生の声を拾うなど、客観的なデータに基づいた効果測定を重視する。

とかく、まちおこしでは来場者数やイベントによる売上高といった数量データに目が奪われやすいが、同計画はデータの精度とともに観光客と住民とのふれあい、観光客の満足度など品質の部分にもこだわる。

町の人口や商業施設が減少し、行政の資金的援助も望みにくい状況のもと、まちの活性化を進めていくには、住民が主体となった交流人口の増加がカギを握る。そのためには、まちに残っている町家など美しい城下町の景観を守っていくとともに、心のこもったおもてなしで遠来の客にリピーターになってもらう必要がある。また、まちの魅力づくりを継続していくためのしくみも必要である。

現在、同計画が進めているまちづくりは、住民の手によるまちづくりとして注目度の高い社会実験であり、その成果は着実に上がってきた。

（井阪、丸尾）